小豆島の地域産業を学ぶための事前学習 (第 2 報)

—素麺製造業, 製塩業, 交通および観光, 産業一般・農業, 壺井栄『二十四の瞳』について—

香川貴志^{*1}

Preliminary Study on Local Industry on Shodoshima Island (Part 2):
Somen Manufacturing, Salt Industry, Transportation and Tourism, General
Industry, Agriculture, and Sakae Tsuboi's "Nijyushi-no-Hitomi (Twenty-Four Eyes)"

Takashi KAGAWA

抄 録: 本稿は, 2024 (令和 6) 年度前期集中開講科目「地理学特講」(学部), および現地授業を合同実施する大学院前期開講科目「社会科教育実践演習-地理-」における事前学習の成果の一部を整理したものである。本誌投稿規程の 1 論文あたり頁数の上限のため, 本論文は第 1 報と第 2 報からなる。これら 2 編の論文は主に事前学習で受講生と筆者が分担した, 訪問地に関わる文献の要旨から構成される。今年度は離島という特殊な条件のもと, 観光業にとどまらず, とくに食品工業が発達した小豆島に現地授業のフィールドを定めた。このうち本稿 (第 2 報) には, 素麺製造業, 製塩業, 交通および観光, その他の産業全般, そして小豆島のイメージを表象する壺井栄『二十四の瞳』を扱った文献の要旨が収められている。また, 本稿前編 (第 1 報: 香川, 2025a) には, 筑波大学人文地理学研究室が 2022 年度に実施した地域調査の成果, オリーブ関連産業と醤油醸造業に関わる文献要旨が格納されている。紙幅の都合により, 事前学習で扱った地形図読図演習については, 本誌掲載の別稿 (香川, 2025b) にまとめている。

キーワード: 離島, 食品産業, 事前学習, 文献精読, 文献要旨, 小豆島

I. 本稿の構成

本稿の前編 (香川, 2025a) に記したとおり, 本誌には 1 論文あたりの刷上り頁数に 15 頁という上限がある。この制約に加えて, 全部で 5 コマ (10 時間) 分を費やした事前学習会の主要部をなす文献要旨の執筆 (精読を経たとりまとめ作業) で対象となった文献の総数は 67 編に及んだ。これらの文献要旨を「追い込みレイアウト」で配置しても, その分量だけで本誌の上限頁数を超えてしまう。事前学習会の内容の記録も前編では必要だったので, やむなく文献要旨を途中で分割して 2 本の論文で整理することにした。

II. 本稿 (第 2 報) で扱う文献がカバーする領域

本稿は, 前頁の抄録にも記したように, 素麺製造業, 製塩業, 交通および観光, その他の産業全般, そして壺井栄『二十四の瞳』を扱った文献の書誌情報と要旨を収録している。このうち製塩業については, 生産方法の進展に伴い小豆島では既に衰退した産業なので, 精読の対象となった文献は歴史学や歴史地理学的な観点に立ったものである。また, 交通および観光においては, 今回の現地授業でも多用した公共交通機関である小豆島オーリーブバスに関する論考が含まれる。さらに, 小豆島の農業を代表する電照菊栽培, そして城郭造営の際の石垣で多用された花崗岩の切り出しについては, その他の産業全般に含めている。

^{*1} 京都教育大学教育学部

前編（香川，2025a）で触れた映画鑑賞会で上映した作品の原作・壺井栄『二十四の瞳』は、教員を志す受講生が多い中で取り上げる価値を見出した文学作品である。この作品をめぐるのは、文学的・教育的に多彩な論考がみられる。

以下には引用・参考文献（付録で扱ったものは割愛）に続けて、付録として上述の要旨（素麺製造業，製塩業，交通および観光，産業一般・農業，壺井栄『二十四の瞳』を扱った文献）を掲載している。本稿の前編（香川，2025a）には、本稿に収録できなかった文献要旨（筑波大学人文地理学研究室が2022年度に実施した地域調査の成果，オリーブ関連産業，醤油醸造業）を付録として掲載している。本稿と併せて参照のうえ，小豆島を訪問する際の礎石として活用いただければ幸いである。

謝辞

本稿および姉妹編となる第1報（香川：2025a）の執筆に際しての文献収集では，山陽学園大学非常勤講師の今井英文氏，京都教育大学附属図書館の職員の皆様に多大なお力添えをいただきました。末筆ながら記して御礼申し上げます。なお，本研究で紹介した授業実践方法については，2024年8月25日に名古屋学院大学で開催された2024年度日本地理教育学会大会において発表しました。

引用・参考文献（本稿付録および香川（2025a）付録に掲出した計67編の文献は割愛）

香川貴志（2025a）小豆島の地域産業を学ぶための事前学習（第1報）—主にオリーブ関連産業と醤油醸造業について—。『京都教育大学環境教育研究年報』，33, pp. 37-50.

香川貴志（2025b）。「二十八の瞳」が巡った小豆島での産業学習—2024（令和6）年度「地理学特講」「社会科教育実践演習-地理-」（大学院）の覚え書き—。『京都教育大学環境教育研究年報』，33, pp. 61-74.

付録（事前学習で扱った文献の要旨）

受講生が要旨執筆とキーワード選定を担当する文献は，経済的な負担を避けるため，他大学等から取寄せる必要があるものは避け，本学所蔵資料，DOIやIR（機関リポジトリ）等のWebサイト経由で無償ダウンロードできるものに限った。なお，すべての文献要旨とキーワードは，香川による推敲を経ている。また，各文献のコード番号に添えたアルファベットは，文献入手に関わる情報であり，次のような意味を持っている。Web：DOIやJ-STAGEを経由して入手可，IR：機関リポジトリで入手可（CiNiiではWeb入手不可能と表示される場合があり，こうしたケースでは各大学のWebサイトから入手できることもある），Lb：本学附属図書館または地理学研究室で所蔵，NDL：国立国会図書館デジタルコレクション，Re：附属図書館経由で他大学等から取寄せ。

★組版の関係により，Key Wordsの一部が複数の行，Abstractの多くが6行で表記されている。

「小豆島 素麺」ならびに「小豆島 そうめん」で検索してヒットするもののうち，地理学に関連が深いと考えられる4ページ以上の文献を厳選のうえ掲出した。

▼ Sm01 Web,26p.

Reference：宮寄晃臣（2012）. 小豆島伝統産業—小豆島手延素麺協同組合と有限会社井上誠耕園を事例に—。専修大学社会学研究所月報，587・588（合併号），91-116.

Key Words：グローバル資本主義，高齢化，バブル崩壊，産業振興，ファブレス企業

Abstract：小豆島は，島嶼という位置的不利が影響して，バブル崩壊後に従前からの高齢化に拍車がかかり，新世紀に入って以降はグローバル資本主義の顕在化によって苦境に立たされた。ここから脱却するためにグローバル資本主義に飲み込まれない独自の路線をとった企業・団体がある。それが本稿で扱われる小豆島手延素麺協同組合と井上誠耕園である。前者は製造業者間で品質保証の基準を設けて製品「島の光」を生み，後者はオリーブオイルの生産に留まらない自然志向の生活様式を提案するに至り，両組織は一種の小豆島モデルを確立した。

▼ Sm02 Re,8p.

Reference : 橋本紘二 (2017). 橋本紘二の田園活写 (11) 天日で干す小豆島そうめん. 現代農業, **96** (3), 294-301.

Key Words : 慶長年間, 大和国, 純正ゴマ油, 協同組合, 高齢化, 天日干し

Abstract : 本稿は, 小豆島素麺の生産現場を簡潔な説明文を施して写真集風にまとめた著作である。小豆島素麺は, 慶長年間に伊勢参り道中の大和国(奈良県)で素麺生産の技法を学び持ち帰ったのが起源とされており, その後は小麦や塩, そして純正ゴマ油を使う製法が磨かれていった。小豆島手延素麺協同組合の組合員数は, 最盛期には約230件を数えたものの, 高齢化の進展で後継者がいない場合の廃業等も手伝って, 現在は約110軒にまで減少している。しかし, 天日干しに拘る伝統的な生産風景は, 小豆島の風景の一部に溶け込んでいる。

「小豆島 製塩」「小豆島 塩業」ならびに「小豆島 塩」で検索してヒットするもののうち, 地理学に関連が深いと考えられる4ページ以上の文献を厳選のうえ掲出した。

▼ Ps01 NDL,18p.

Reference : 落合 功 (1995). 小豆島塩業の展開と大坂城御詰塩. ヒストリア, **147**, 24-41.

Key Words : 幕藩制社会, 小豆島水軍, 水主役, 御詰塩, 兵糧塩, 天領, 津山藩, 基幹産業

Abstract : 本稿は, 大坂城御詰塩を中心とした小豆島塩業の盛衰についての論考である。中世の小豆島は, 同地を拠点とする水軍や製塩業で賑わい, 豊臣期に入って以降は城の造営に関わる石切り場, 小田原や朝鮮出兵の際の水主役の派遣, 大坂の陣では徳川方への兵糧提供で発展を遂げて, 御詰塩が多く納品された。その後, 塩業は競合地域の成長で相対的に地位を下げたが, 天領から津山藩領となっても御詰塩は継続納品された。このことから天領への回帰志向がうかがえる。醤油産業の発展とともに島内では塩を安価で売り, 基幹産業を支えた。

▼ Ps02 IR,18p.

Reference : 橋詰 茂 (1988). 中世小豆島における塩の生産. 駒澤史学, **39・40**(合併号), 280-297.

Key Words : 御白塩, 肥土荘, 石清水八幡宮, 塩浜, 塩年貢, 弓削島

Abstract : 近世以降に比べ研究成果が乏しい小豆島の中世製塩についての歴史学的・経済史的見地からの考究である。手法は各種史料の分析によるが, 各所で研究成果が比較的豊富な愛媛県弓削島の事例との比較がなされ, 地域間比較の観点から地理学的な要素を備えている。中世において石清水八幡宮に納められた御白塩は, 現在の土庄町土庄や瀏崎あたりの肥土荘と呼ばれた荘園で産し海上輸送され畿内へ運ばれた。本稿では塩浜の形態, 生産者の諸相, さらに塩年貢に関する検討が施されたが, 残る不明点と塩流通については別稿に譲るとしている。

「小豆島 交通」「小豆島 観光」で検索してヒットするもののうち, 地理学に関連が深いと考えられる4ページ以上の文献を厳選のうえ掲出した。

▼ Tr01 Web,10p.

Reference : 岡田幸子・小林一郎・増山晃太・田中尚人 (2016). 軌道用敷石の規格と産地に関する研究. 土木学会論文集D2(土木史), **72**(1), 76-85.

Key Words : 軌道用敷石, 花崗岩, 日本工業規格, 軌道事業者

Abstract : 近代日本の都市交通の主役を担った路面電車は, 多くの場合に軌道敷で石材を使用する。本研究は, こうした舗装石材である「軌道用敷石」の規格と産地を調査・整理した論考である。その結果, 軌道用敷石の主要な産地は全国に6か所あり, 香川県小豆島もその一つに数えられたこと, 産地によって花崗岩の色調に差異があることなどが判明した。また, 戦後に日本工業規格によって規格が定められるまでは, 軌道事業者ごとに軌道用敷石の規格が異なっていたため, 注文や製造の際に効率的な仕事を妨げていたという事実も明らかになった。

▼ Tr02 Re,15p.

Reference : 岡庭 博 (1968). 小豆島観光調査(大阪産業大学観光研究会による)の紹介—日本交通公社による調査との対比検討—。大阪産業大学紀要, **19**, 127-141.

Key Words : 観光投資, 宿泊業, 日本交通公社, 投資効果, 雇用効果, 生産効果

Abstract : 本研究は, 大阪産業大学が独自に調査した結果をもとにして, 同様の調査項目で実施された日本交通公社(以下では公社)による小豆島観光調査との比較検討結果をまとめたものである。1960～64年の4年間に小豆島を訪れる観光客

は急増したが、その投資の効果としての雇用効果の大部分は物品販売によるもので、会社による推計ほどには楽観視できない。推計の甘さは宿泊業を規模別にみた場合の投資効果においてもみられ、大規模宿泊施設では会社推計ほどの投資効果が得られておらず、中小規模施設の方が生産効果が高いと考えられる。

▼ Tr03 Web,18p.

Reference : 金光 淳 (2018). フェスティバルは地域をどのように表象し何を可視化するのか. 理論と方法, **33**(1), 114-131.

Key Words : 観光のまなざし, 現代アート, 地域表象, ブランド連想ネットワーク分析

Abstract : 本研究は、アート・フェスティバルが地域問題の可視化、地域表象の形成においていかなる役割を果たすのか瀬戸内国際芸術祭を事例として論じたものである。実際、観光関係者によって歴史的に構成されてきた「観光のまなざし」はアートを通じて地域イメージの創出に寄与し、それが経済にも波及する。小豆島においてはアートが地域イメージに大きく貢献することなく、他の観光要素や伝統産業のイメージがより前面に出している。ただ、アートは地域問題を観光客の目に焼き付け、固定観念を揺さぶるような役割を果たすと考えられる。

▼ Tr04 Re,8p.

Reference : 月刊自治研編集部 (2017). 住民ニーズにもとづく「公共交通の再生」—小豆島—. 月刊自治研, **60**(709), 43-50.

Key Words : 路線バス, 運賃体系, 通学定期助成, 運転免許自主返納, 小豆島中央病院, 小豆島中央高校

Abstract : 赤字続きで経営破綻した小豆島バスを継承し、島内自治体（土庄町と小豆島町）と住民が協力して発足した小豆島オーリーブスは、発足間もない頃の補助金不正受給による返納金支払いで苦境に陥った。そこから路線バス継続のため、自治体による2つの施設統廃合（小豆島中央病院と小豆島中央高校）を支える公共交通機関として、路線延伸、運賃体系再編、通学定期助成、運転免許自主返納者への支援を相次いで打ち出し、赤字予想額も当初予測の1/10に抑制している。しかし、今後を見通すと運転手不足など深刻な課題を抱えている。

▼ Tr05 Web,5p.

Reference : 佐野修久 (2010). 地域調査研究 ソーシャルビジネスと資金調達—第2回 小豆島オーリーブス—. 北海道東北地域経済総合研究所機関誌, **71**, 27-31.

Key Words : ソーシャルビジネス, 市民資金, 生活交通路線, 地域生活交通路線, 経済的リターン

Abstract : 小豆島バスの経営破綻を受け、自治体・企業・個人（島民）からの市民資金が出資という形態で募られてソーシャルビジネスが展開され、小豆島オーリーブスが設立をみた。赤字が生じた際に国と県から補助を受ける「生活交通路線」、同じく県と地元自治体からの補助を得る「地域生活交通路線」系統しか路線がないため経済的リターンは困難が予想され、出資よりも寄付の方が適切であったかもしれない。ただ、この取組は「島民の足は島民が守る」という意識の醸成をもたらし、経営上の工夫もあって利用者は当初予想より多くなっている。

▼ Tr06 Re,12p.

Reference : 四国運輸研究編集部 (2019). わがまちを訪ねて (第25回)

香川県小豆郡土庄町・小豆島町. 四国運輸研究, **37**, 2-13.

Key Words : シェアサイクル, 路線バス, 運転手不足, ICカード, 日本遺産, 小豆島ブランド

Abstract : 本稿は、小豆島地域交通協議会が「環境にやさしい小豆島の持続可能な公共交通再生への挑戦」でEST交通環境大賞・国土交通大臣賞を受賞したことを契機として実施された行政関係者の座談会の記録である。同地の交通施策は、シェアサイクル、路線バスの系統や運行システムの改善で実施されたが、ICカードであるIrucaの全国拡大や運転手不足の克服など改善課題も多い。また、主要産業である観光については、岡山県笠岡市や丸亀市とともに2019年に認定された日本遺産を活用しての誘客、小豆島ブランドの一層の拡充が強く期待される。

▼ Tr07 NDL,7p.

Reference : 鈴木美和子 (1982). 斜面の地形と崩壊の発生について—小豆島を例に一. 国土地理院時報, **56**, 32-38.

Key Words : 土地条件調査, 災害対策, 崩壊, 土石流, 花崗岩, 遷急線, 谷型斜面

Abstract : 本稿は、災害対策に役立てることを目指し、土地条件調査の成果から崩壊や土石流が生じやすい場所の特性を小豆島全域で詳らかにした研究である。小豆島は1974（昭和49）年と1976（昭和51）年に豪雨災害を受け、人的物的に甚大な被害が生じた。同様の災害を未然に防ぐには危険度が高い場所の特定が大切である。この研究では地質・植生・地形などと災害発生の関係が追究された。直接要因は降水量にあり、崩壊や土石流が生じやすい場所の特徴を挙げると、とりわけ傾斜30～35°の斜面や谷型斜面、遷急線で危険度が高いとわかった。

▼ Tr08 Web,16p.

Reference : 富岡儀八 (1960). 瀬戸内海における機帆船交通の二三の特相. 地理学評論, **33**(7), 363-378.

Key Words : 瀬戸内海, 機帆船交通, 交通圏, 工業地帯化

Abstract: 本稿は, 瀬戸内海交通の主体である機帆船交通の実態を数量的に分析し, 交通圏の設定, 交通形態・交通流の性格, 工業地帯化との関連性を考察した論考である。瀬戸内海は, 古来国内幹線交通路として, 広範かつ高度の利用価値を呈してきた。機帆船は明治末に出現し, 大正中期から昭和初頭にかけて広く全域で普及した。瀬戸内海交通は臨海工業地帯化の進捗に伴い, 汽船利用の高度化が要求されている現在でも, 瀬戸内海貨物移送の主体は機帆船にあり, 機帆船交通は瀬戸内の工業地帯化の一翼を担うと同時に工業圏設定の指標ともなり得る。

▼ Tr09 Web,12p.

Reference : 投石文子 (2009). ツーリズムによる地域活性化—淡路島と小豆島の比較から—。日本観光学会誌, **33**(7), 363-378.

Key Words : ツーリズム, 島, 地域社会, 風土資産

Abstract : 本稿は, 様々な風土資産が豊富に存在している淡路島と小豆島の調査結果を踏まえ, ツーリズムにおける島の活性化が考察されている。両島は, 世界有数ともいえる風土資産を具備している。この資産を積極的に活用し, 行政と共に情報発信に取り組む小豆島, 島内3市が個別的に資産活用を図る淡路島では, 島としての一体化に大きな違いがある。文化面において類似点が多い両島では, 固有の文化が伝承されていることが予想される。このような, 島の持つ優位性を見直し, 独自の文化を通じたツーリズムの視点で地域活性化すべきであろう。

▼ Tr10 Web,10p.

Reference : 平野里奈・土井健司・猪井博登・青木保親・山崎晴香 (2020). 地域公共交通を対象とした社会的インパクト評価に関する研究—地方路線バス網の再編を対象に—。土木学会論文集D3 (土木計画学), **75**(6), I_555-I_564.

Key Words : 地域公共交通, 社会的インパクト評価, PDARUサイクル, ロジックモデル

Abstract : 地域公共交通は, 運転手不足や利用者減少により, 路線廃止などのサービス低下が各地で生じている。小豆島の地域公共交通であるオーリーブスは, 自治体や住民の出資によって設立された組織である。当初は経営悪化が問題とされた。そのため, 小豆島の住民の生活実感に即した社会的インパクト評価でロジックモデルが作られた。この社会的インパクト評価では, 「外出頻度の変化」「自立した外出」「家族・知人・地域との関わり」「住民のウェルビーイング」という観点からロジックモデルが作られたが, 検証を経て改善課題も見えてきた。

▼ Tr11 Web,7p.

Reference : 風呂本武典 (2017). 離島における新しいツーリズムと観光ホスピタリティ醸成について—瀬戸内国際芸術祭における小豆島を事例に—。広島商船高等専門学校紀要, **39**, 69-75.

Key Words : 瀬戸内国際芸術祭, コンテンツツーリズム, 産廃問題, 小豆島八十八箇所, ホスピタリティ

Abstract : 土庄町や小豆島町の役場への聴き取りを軸にして, 小豆島の観光を考究した論文である。瀬戸内国際芸術祭は徐々に知名度を上げ, 小豆島のコンテンツツーリズムを支えるまでに成長した。一方, 豊島の産廃問題などツーリズムとは相いれない改善課題も残っている。しかし, 温暖な気候の小豆島は, 居住者のホスピタリティに溢れた温和な「もてなし」が観光業を下支えしている。このホスピタリティは, 少なからず小豆島八十八箇所巡礼での接待とも無関係ではあるまい。機会を改めて宗教ツーリズムの観点からの研究にも取り組んでみたい。

▼ Tr12 Web,17p.

Reference : 松井恵麻 (2023). 地域社会に資するアートイベントとは何か。地理科学, **78**(1), 3-19.

Key Words : アートイベント, 芸術祭, アートプロジェクト, 地域活性化

Abstract : 本稿は, 都市から離れた地域における観光振興事業や地域活性化事業について, 小豆島におけるオーリーブ果実を原料にした化粧品の製造と販売を行うアートイベントに着目している。アートプロジェクトMはアートを介して地域資源を再発見し観光資源に活用する視点を備えていた。しかし, COVID-19の影響で観光客数が急激に減少し, 方針転換が余儀なくされた。そこで, 地域住民との関係性を維持しつつ地域の固有性や特徴を踏まえた新たな「妖怪アート」の在り方が模索された。この試みは継続的な地域振興につながる可能性がある。

「小豆島 産業」ならびに「小豆島 農業」で検索してヒットするもののうち, 地理学に関連が深いと考えられる4ページ以上の文献を厳選のうえ掲出した。ただし, 既出の産業の各欄で掲出済の文献は除いた。

▼ In01 Web,4p.

Reference : 岡田昌彰 (2014). 瀬戸内海の景観多様性を論じる (6) 醬都・小豆島の産業景観。瀬戸内海, **68**, 36-39.

Key Words : 瀬戸内国際芸術祭, 醤油蔵通りプロジェクト, 醬の郷, 産業遺産, 馬木地区, 苗羽地区

Abstract : 国内外から注目された瀬戸内国際芸術祭では、小豆島の馬木地区や苗羽地区に展開する醬の郷(ひしおのさと)で醤油蔵通りプロジェクトが行われた。芸術作品が歴史ある産業景観と調和する取組は、産業と芸術の共存という新提案ともなった。醤油産業が醸し出す景観は、醤油蔵が並ぶ一種の産業遺産とみなすことができる。木樽を活用した東屋(休憩所)や醸造道具を展示したマルキン記念館などは当地を代表する観光スポットとしても著名である。石材の移出と醸造技術の移入d発展を遂げた小豆島は、産業の連関から生まれた島といえる。

▼ In02 IR,20p.

Reference : 小川 護 (1995). 小豆島における電照菊生産地域の形成と構造. 沖縄国際大学教養部紀要, **22**, 19-38.

Key Words : 花き栽培, 電照菊, 露地菊, ビニールハウス, 大型ガラス温室, 大阪市場

Abstract : 本研究は、戦前からのオリーブ栽培や青リンゴ栽培が衰退する環境のもとで始められた池田町(現・小豆島町)の花き栽培について、各種統計資料や生産地域での聴き取り調査を基盤として進めた論考である。市場価値を高めるため、さらに年末年始の高需要期への対応として、ビニールハウスや大型ガラスハウスを導入した電照菊栽培が普遍化し、それが隣接する土庄町にも拡大した。菊栽培には、露地栽培、半電照栽培と電照栽培があり、各々の盛んな地区が小豆島内に分布するが、いずれも伝統的に大阪市場が主な出荷先となっている。

▼ In03 NDL,19p.

Reference : 木原啓吉 (1986). 小豆島プログラム—新しい瀬戸内の観光文化—。地域開発, **259**, 15-33.

Key Words : 文化観光, 離島, 地場産業, 地域経済, 基盤整備, 素材環境

Abstract : 本稿は、1985年に高松で開催された「明日の四国を考える」という会議の内容を座談会記録的にまとめたものである。参加者は学界・官界・地元経済界など地域経済に造詣が深いメンバーである。小豆島は離島という特殊性の下に文化観光に注力しているが、その基盤としての地場産業や地域経済の重要性が指摘されている。また、1988年に予定されている瀬戸大橋の完成を前にした期待も随所で滲み出している。文化観光を進めていくには、実在する素材の活用、それに携わる官民双方の積極性と取組の継続性が重要であるとの結論が導出された。

▼ In04 Re,9p.

Reference : 小村良二 (2006). 近畿周辺地域の石材(切石) —小豆島石—. 地質ニュース, **620**, 42-50.

Key Words : 花崗岩, 採石丁場, 大坂城残石記念公園, 修羅, ベンチカット工法, ガット船, 砕砂

Abstract : 本稿は、正岡子規をはじめ小豆島を詠んだ俳句や現地撮影写真を多用しつつ、小豆島の切石(採石)を論じた個人的な理化学論文である。良質な花崗岩として名高い小豆島石は、島の北部~北東部に優れた採石丁場が多く分布し、道の駅としても整備されている大坂城残石記念公園には、大坂城大手門近くの巨石には及ばないものの、修羅に載せた巨石の展示もみられる。現代の採石は階段状に石を切り出すベンチカット工法によるもので、石の運搬もガット船が使われるようになった。今後は砕砂としての需要も視野に入れておくべきだろう。

▼ In05 IR,22p.

Reference : 高桑 紘 (1984). 香川県小豆島における降水の流出量と貯水量に関する研究. 香川大学一般教育研究, **25**, 131-152.

Key Words : 降水流出率, 集水域, 貯水量, 貯水率, 水資源管理, 安山岩, 花崗岩

Abstract : 本研究の目的は、水が不足しがちな島嶼において、降水流出量や貯水量・貯水率を精査し、水資源管理の一環としての水資源再開発の基礎情報を提供することである。調査地域は小豆島全域と地域内主要河川流域であり、地形や地質・岩石、斜面の傾斜、水系や谷密度などの基本情報がまとめられた後、各々の集水域における降水量、流出率や貯水率が数値で示される。貯水率が最も高いのは粟地ダムを擁する安田大川で約27%だったが、貯水率が0%で水資源管理の観点から渇水を視程に収めた改善が強く望まれる水系が多く確認された。

▼ In06 IR,5p.

Reference : 中川啓子 (2017). 学生チームによる小豆島調査—Iターン・Uターン, 産業から瀬戸芸まで~島外の若者視点を通じて—. 成熟社会研究所紀要, **1**, 59-63.

Key Words : 観光資源, Iターン, Uターン, 瀬戸内国際芸術祭, インタビュー, 島暮らし

Abstract : 学生がチームを組み、小豆島で島内スポットめぐりと島民インタビューを行った結果を整理した事例報告である。島内観察ルートや行き先などの全てを学生が決め、インタビューは年齢の近い30代のI・Uターン者に直接質問など投げかけた。結果、スポットでは瀬戸芸の関心は非常に低く「何をしているのかわからない」という状況であった。だが、食や迷路のまちなどの素朴な事柄は魅力的に映り、レンタサイクルや渡し舟なども楽しんだ。また、移住者の家族や地域文化を大切にしている暮らしなどは魅力的・理想的に映ったようである。

▼ In07 Re,5p.

Reference : 中村研二 (2011). 地域未来研究センター 地域だより 小豆島の伝統食品産業クラスターの歴史的展開. 日経研月報, 395, 42-46.

Key Words : 伝統食品産業, 塩田, 外来先進技術, 瀬戸内海航路, 京阪神市場, 生産管理

Abstract : 本稿は, 地域に根付いた小豆島の伝統食品産業(ゴマ油, 素麺, 醤油, 佃煮)の集積について, その存立基盤を歴史的, 産業連関的に考察した地域研究である。小豆島の伝統産業は海水を原料として塩田で産した塩の他は, ゴマ, 小麦, 大豆などは島外から移入するもので, 技術面でも素麺が奈良県の三輪, 醤油が和歌山県の湯浅から外来先進技術を得たと伝えられる。瀬戸内海航路は, 原料移入と製品移出(主に京阪神市場)で活用された。塩とゴマ油が素麺製造で用いられ, 塩→醤油→佃煮という生産の連関や生産管理が確立されている。

▼ In08 Web,14p.

Reference : 西田博嘉 (1975). 小豆島における切り花ギク産地の形成過程とその生産構造. 人文地理, 27(6), 667-680

Key Words : 池田町, 農業王像改善事業, 花き園芸集団, 露地ギク, 電照ギク

Abstract : 瀬戸内の切り花ギク産地の中にあつて最大の栽培面積を持つ池田町(現・小豆島町)は, 切り花ギクの作型分化が著しい。戦前の花き園芸は試作研究の段階に留まっていたが, 戦後の食糧事情の回復とともに発展していった。その主力は露地ギクと電照ギクである。瀬戸内の温暖な気候は冬季の無加温によるキクの栽培を可能にし, 半年間にわたるキクを生産と出荷を実現させた。また, キクの作型分化はキクの単作化やキクの周年栽培をもたらして生産量を増大させた。これらの実現には池田町の花き園芸集団が多大な役割を果たしている。

▼ In09 Web,5p. + 1p.

Reference : 西山壮一・弥永孝一 (1988). 降水量から見た香川県における渇水の特性と香川用水の効果. 農業土木学会誌, 56(4), 337-341 + a1.

Key Words : 降水量, 統計資料, 香川用水, 早明浦ダム, 水利用

Abstract : 少雨地帯である香川県の渇水の特性を知ることが目的に行つた降水量の統計的解析の結果と, 讃岐本土の農業に香川用水がいかなる効果をもたらしたかを論じている。各月降水量を示した統計資料により, 夏季の少雨出現率が高いことが分かる。渇水を補う香川用水は高知県の早明浦ダムに水源をもつ。高知県では夏季に雨が多く, 月降水量の年ごとの多寡の程度が多度津とほぼ同じであることから, 香川用水は水資源的に恵まれた水源を持つ。香川用水の効果は多岐に及ぶが, 特に水稲生産では干害の被害量の減少など著しい効果が確認できる。

▼ In10 Re,4p.

Reference : 山下洋史 (2017). 地理的稀少性強調シナリオによる観光資源の付加価値戦略に関する研究. 日本経営システム学会全国大会講演論文集, 59, 58-61.

Key Words : 地理的稀少性, 観光資源, 付加価値戦略, ギネス認定, 土渕海峡, エンジェルロード

Abstract : 本論文は, 当該地域において既に存在する事物はその非日常性を強調することで価値を増すと説く。つまり, 観光資源となる事物を見出したのちに, それに地理的稀少性を付与することによって価値を高めるという手法である。こうした方法は付加価値戦略と呼ぶことができよう。小豆島の土庄近辺においては, 干潮時に陸繋島が出現するエンジェルロード, 申請の際に工夫を凝らしてギネスブック認定を得た「世界一幅の狭い海峡」の土渕海峡がある。こうした事物を巡る観光客に対しては, 域内交通の利便性が良いなどの日常性も重要である。

▼ In11 IR,72p.

Reference : 若林政史・土田哲也・田中嘉徳 (1981). 小豆島の社会経済的分析—航路問題を中心にして—。香川大学経済論叢, 53(3), 752-823.

Key Words : 離島, 海上交通, 航路, アンケート, 各種地域振興法

Abstract : 本論文は本土と離島を結ぶ海上交通(航路)の実態について, 小豆島3町(土庄町, 池田町・内海街=両町は合併して現在は小豆島町)の住民や関係機関への聴き取り調査とアンケートを通じた考察で, 70頁を超える労作である。小豆島は香川県だけでなく兵庫県や岡山県とも航路で結ばれているが, これらの本土とは海上交通に依存する他はなく, それが離島特有の隔絶性や不便さ, 財政悪化に負の影響を及ぼしている。2024年現在では廃止されている航路も含まれる詳細な集計結果の諸表は, データとしても資料価値が極めて高い。

「二十四の瞳」で検索してヒットするもののうち, 地理学や教育に関連が深いと考えられる4ページ以上の文献を厳選のうえ掲出した。

▼ Nj01 IR,11p.

Reference : 荒川志津代 (2009). 映画『二十四の瞳』に描かれた子ども像—戦後における子どもイメージの原点についての検討—. 名古屋女子大学紀要 人文・社会編, **55**, 9-19.

「反戦」意識, 「ナショナル・アイデンティティ」, 都市中間層の子ども

Abstract: 『二十四の瞳』の3つの特徴として, ①製作者サイドの主観的「反戦」意識のメッセージを内包しようとしたこと, ②観客者サイドにも「反戦」メッセージを求める土壌があったこと, ③結果, 新たな「ナショナル・アイデンティティ」の形成に寄与したことが特徴として挙げできる。また, 本作品の子ども像は時代の流れに沿った描き方が施され, 近代以降に子どもらしいと言われるようになった欲求を持つ姿が描かれている。このような子ども像が圧倒的な支持を得ていたことから, 当時の多くの大人が求めていた子ども像を推察できる。

▼ Nj02 Lb,14p.

Reference : 井田仁康 (2007). 文学作品と地形図を用いた地理教育—『二十四の瞳』と5万分の1地形図—. 大嶽幸彦先生退職記念事業会編『地域と地理教育』共同出版, **52-65**.

Key Words : 地理的技能, 地形図, 文学作品, ストーリー性

Abstract: 本研究は, 『二十四の瞳』を素材として, 大石先生の自転車通勤ルートをたどるなど, 地形図に親しむ学習を開発・実践し, その効果の観察を目的とした論考である。著者によると, 地形図は地理的技能の地図に関する学習のうち最も基礎的な内容である一方, 読図には相応のセンスや観点が備わっていないと学習し難いとのことである。文学作品を活用することで, 単なる地形図を読む訓練だけでなく, 地理学習にストーリー性が付与され, 国語科と社会科(地理領域)の両観点から, 科目横断的な意義のある学習を行えると主張している。

▼ Nj03 Re,5p.

Reference : 大岡秀明 (1989). 2つの瀬戸内物語—『瀬戸内少年野球団』と『二十四の瞳』をめぐって—. 日本児童文学, **35**(11), 16-20

Key Words : 瀬戸内少年野球団, 敗戦, 平和, 女教師, 子ども, 市井の人々

Abstract : 1952年に発表された壺井栄『二十四の瞳』, 1979年出版の阿久悠『瀬戸内少年野球団』は, 小豆島戸淡路島という舞台の違いはあれ, いずれも映画化され, とともに女教師と子ども, 敗戦がモチーフに用いられた小説である。本論文では両者の相違点と理事点が追究されているが, とくに類似点を通じて両作品の狙いを探ろうとする点に面白さがある。これら2作品の主人公は, 共通して戦争や敗戦に翻弄された市井の人々の一人としての一般市民であり, 我われは社会の激動が個人に与える辛苦や絶望, ささやかな希望を嗅ぎ取ることができる。

▼ Nj04 NDL,7p.

Reference : 尾崎宏次・山本 武・加藤彪二 (1954). 「二十四の瞳」と「日本敗れず」をめぐって(鼎談). 知性, **1**(5), 72-78.

Key Words : 戦後社会, 木下恵介, 阿部豊, 反戦映画, 敗戦裏面史, マスメディア, 商業主義

Abstract : 戦後民主主義が定着してくる1954年, 木下恵介監督による反戦映画『二十四の瞳』と阿部豊監督による敗戦裏面史を描く映画『日本敗れず』が同じ年に封切を迎えた。これらの両者は価値観が真逆ともいえる部分を抱えているが, 本稿著者にあたる鼎談メンバー(尾崎: 演劇評論家, 山本: 映画プロデューサー, 加藤: 政治評論家)は「映画製作は資本主義の下での商業主義」と概ね意見の一致をみて, マスメディアを批判的にとらえている。制作現場に政治思想は希薄であり, 映画は世論形成や社会風潮をリードする存在になり得るといふ。

▼ Nj05 IR,4p.

Reference : 汲田克夫 (1982). 現代学生の理想の教師像—壺井栄「二十四の瞳」の感想文から—. 教育学論集, **11**, 79-82.

Key Words : 感想文, 教師らしさ, 母性, 結びつき, 前向き, 明朗快活

Abstract : 学生の読書感想文を, 教育史を専門領域とする著者が分析した論考である。結果, 学生たちが理想とする教師像が『二十四の瞳』の主人公である大石先生から6つ導出された。それは①教師らしくない教師, ②母性としての教師, ③人間同士の結びつきを大切にす教師, ④前向きに生きる教師, ⑤明朗快活な教師, ⑥子どもを裏切らない教師, である。学生たちは自身が児童であったころの教師, 現代の教師, 近い将来の教師に主人公を重ね合わせている。昨今の教育課題での検証を試みている者もあり, 読了後の感動の大きさを看取できる。

▼ Nj06 Re,5p.

Reference : 倉石一郎 (2023). 学校はめくるめくワンダーランド—歴史と経験への旅(第3回)『二十四の瞳』が問いかける根深きジェンダー秩序—. 書齋の窓, **686**, 48-52.

Key Words : 木下恵介, 高峰秀子, ジェンダー秩序, 岬の分教場, 複式学級, 社会的格差

Abstract : 本稿は, 壺井栄原作『二十四の瞳』と木下恵介監督・高峰秀子主演の同作品の映画を題材にして, 両作品から学校や社会を照射した論考である。両作品に共通して基盤となるのは, 戦前戦中のジェンダー秩序に満ちた学校である。この

秩序は舞台である岬の分教場に限らず、当時の社会にみられた普遍的構造で、岬の分教場は複式学級で運営されている男女共学だったため、むしろ例外的な学校だった。戦火が激しくなってからの場面では、ジェンダー秩序とともに貧困や社会的格差の描写も多く、我われは当時の社会状況を学ぶことができる。

▼ Nj07 Re,16p.

Reference : 須浪敏子 (2011). 『二十四の瞳』考—大石先生・稲川先生のモデルと抵抗の表現と—. 四国学院大学論集, 136, 1-16.

Key Words : 大石先生, 稲川先生, プロレタリア解放運動, 大正デモクラシー, 反戦思想

Abstract : 本稿は、壺井栄の小説『二十四の瞳』に描かれる主人公の大石先生のモデルを教育関係者や地元関係者の証言から探る探偵活動的な読み方ができる。壺井の基本スタンスは、その夫で共産主義運動に関わった壺井繁治の影響を強く受け、『二十四の瞳』も各所でプロレタリア解放運動や大正デモクラシーの色を滲出する。「アカの教員・稲川先生と大石先生の接点が殆ど無いのはなぜか」との本稿での自問への回答は、壺井の反戦感情が初出原作から『二十四の瞳』への改稿時に大石先生の戦争被害への追想や感傷で表出したという推論で示される。

▼ Nj08 IR,23p.

Reference : 須浪敏子 (2021). 『二十四の瞳』論. 四国学院大学論集, 161, 1-23.

Key Words : 反戦小説, 侵略主義, 非国民的敗北主義, 大正デモクラシー, 戦後民主主義, 母性

Abstract : 各所で『二十四の瞳』の一節を引用し、主人公の大石先生と子どもたちとの会話も加味して、壺井栄の主張を探ろうとした論考である。この小説を反戦小説とするのは容易であるが、日本がWWI以降に侵略主義政策に舵を切り、共産党員を中心として非国民的敗北主義と呼ばれる敗戦待望論まで地下で横行した。だが、大石先生の厭戦思想は大正デモクラシーに端を発する母性が基盤になっているというのが本論文の著者の推論である。この厭戦思想は戦後民主主義との親和性に富み、それが『二十四の瞳』を生む土壌になったと考えられる。

▼ Nj09 Re,17p.

Reference : 黄 益九 (2012). 語られるノスタルジア・蔽される〈記憶〉—壺井栄「二十四の瞳」と〈記憶〉の位相—. 外国語教育論集, 34, 61-77.

Key Words : 無垢な共同体, 感情の共同体, ノスタルジア, 占領政策, 朝鮮戦争, 再軍備, 反戦意識

Abstract : 『二十四の瞳』を精読して解題を試みた力作である。物語の冒頭に描かれた「無垢な共同体」は、戦争の激化とともに「感情の共同体」なる描写へ変わっていく。ただ、この物語の真骨頂は、戦後に岬の分教場へ再赴任する主人公・大石先生が感じたノスタルジアとしての懐かしさ以降にある。敗戦による占領政策下で勃発した朝鮮戦争を受けて、GHQは政策転換し日本は再軍備へ向かう。こうした環境のもと「無垢な共同体」で営まれていた日常生活に思いを馳せるとき、作者の壺井が反戦意識を物語に滲ませたのは彼女の矜持であるだろう。

▼ Nj10 Re,8p.

Reference : 李 先瑞 (2019). 反戦文学の傑作—壺井栄の『二十四の瞳』をめぐる—. アジア言語文化研究, 1, 190-197.

Key Words : 師範学校, 純真無垢, 反戦文学, 第二次世界大戦, 人道主義

Abstract : 『二十四の瞳』に描かれた様々なシーン、作者である壺井栄の筆致を通じて、この文学作品を反戦文学の傑作と評価した論考である。主人公である師範学校出身の大石先生は、絶えず子どもたちの幸せを願う純真無垢な女性教師として描かれている。この作品が発表された頃、表現をめぐる様々な規制が緩和されていたが、露骨な強い表現で反戦を唱えた仕上りになっていないことが多くの人びとから共感を得たのではないかと思われる。隣人を慈しみ不条理から守るというささやかな抵抗の表現は、人道主義の文学として不朽の名作となった。

▼ Nj11 Re,7p.

Reference : 和井田祐司 (2019). 授業実践『二十四の瞳』で学ぶ社会・学校史—学ぶ文化祭の実践報告—. 大阪の歴史教育, 52, 44-50.

Key Words : 教育探究コース, 学ぶ文化祭, 教育史, 新教育運動, 谷山 清, 平和教育

Abstract : この論文は、著者が大阪暁光高等学校の学校行事「学ぶ文化祭」のために新学期から時間をかけて行った授業実践記録である。同校には教育界での就労を目指す教育探究コースがあり、この取組は当コースで行われた。生徒たちが読書や議論を経て得たものを表現する様式の主体性が求められる授業では『二十四の瞳』が題材に選ばれ、戦時下を含む教育史や新教育運動の延齢を受けた女教師の言動から社会環境を多面的に学び、奈良教育大学附属小学校で平和教育に勤しんだ谷山清氏の講話も盛り込まれ、生徒たちの様子の変化が描かれている。